

教育

社団法人 現代教育研究協会

会 報

46

題字 榎本 頼兼 氏

発行所 社団法人 現代教育研究協会
京都市下京区不明門通五条ドル
インターナショナルアカデミー内
〒600-8171 TEL (075) 371-5081
FAX (075) 371-6005

印刷所 株式会社 洛 陽

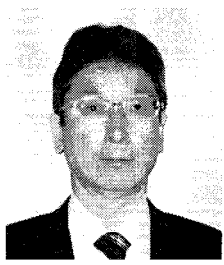
現代教育研究協会の

飛躍を目指して

会長 梶 村 健 一

現代教育研究協会創立から
四十二年、温故知新

現代教育研究協会は今年で創立四十二年を迎えます。私たちは、会を創立された森藤吉先生の熱い情熱をしっかりと受け継いで、これまでの先輩の方々が積み重ねてこられたこの間の道を、より発展させていかなければなりません。そうした観点から、今の時点で過去を振り返り、過去に学ぶことによって、新たな未来への展望を切り開ける



のではなく、いかと思いい、会員の中で当協会の歴

お願ひするしだいです。

史をよくご存知の方々から学ぶことができればと考えましたが、すでにこれまでも何回か節目には座談会等がもたれ会報にも残されているということでした。そこで、事務局の牛尾先生のご尽力で、そうした過去の会報の記事から今私たちが学ぶべきものを再録していただくことになりました。単なる懐古ではなくそこから何かを学ぶことを読み取っていただければ幸いです。

一般社団法人への移行
本協会の課題は多くありますが、一般社団法人への移行という組織の問題が現在の大きな問題として挙げられます。これについては現在事務局を中心にして、精力的に京都府の担当窓口とも調整をしていただいております。できるだけ早い時期に会員の皆様にもおはかりしてスムーズな移行ができるようにしてまいりたいと考えています。これまでの活動がより充実した形で行われるような会のあり方を皆様と一緒に実現していければと願っています。

学校教育と生涯学習の追求

現代教育研究協会は、学校教育と生涯学習の両面にわたっているような観点から現代教育について考え、学んでいます。会員の皆さんには、かつて学校現場の第一線で活躍されていた方々、教育行政に携わっていた方々、さらには、

直接教育の仕事にはかわつておられなかった方々などさまざまなご経歴、お立場の方がお集まりになっています。私は、これこそが本協会の強みであるというように考えています。単に教育の専門家の立場からだけでなく、一般市民の目線でも学校教育を考え、生涯学習を考えていく。そのためには

会員相互の一層の交流、融合を図るとともに会員の皆様に会運営へのご参画をいただくことが大事ではないかと思ひます。会員みんなが居心地のよい会になるよう努めてまいりたいと考えています。これから今日の学校教育の課題と生涯学習の課題とを会員が一体となって追究して行くことを目指していければと願っています。

昨年は講演会を四回開催しました。第一回は、「日本社会における民族学校」京都国際学園の過去・現在を中心に」と題して京都国際中学高等学校河東吉校長先生から、第二回は「パナマの日曜日」はぐれ社員 うたかた駐在日記」の演題で金澤康郎様から、第三回は「香りの文化『香道』体験」を香老舗薫玉堂様から、さらに第四回は前年度に引き続き「日本の文様 今と昔」と題して大内惣介様から貴重なお話を聞かせていただき、また体験をさせていただきました。

いずれも多くの会員にご参加いただき、私たちにとっては学ぶべきことの多い実り豊かな学習の機会でありました。講師の先生方に深く感謝申し上げます。また、秋の一日研修や宿泊研修も多くの会員の御参加のもと楽しい一時をもつことができました。

開かれた組織

本会は会員相互の学習と交流さらに親睦を図ることが目的ですがそれが同時に、年に一回程度は他の教育関係者の方々とともに一緒に学ぶ場を設けたり、広く一般市民の方々にも門戸を広げ、参加していただける公開講座を実施するなど、開かれた協会を目指し会の存在をアピールすることも考えていかねばならないと思ひます。そのことによって本協会がより充実した活動を行うことができ、会員の皆様の自己実現にも資するのではないかと考えます。

「いつでも、どこでも、だれでもが、何でも学べる生涯学習」のもと、人生の生涯にわたって自発的に学び続け、豊かな人生を送るとともに、周りの人のことを考え、社会のことを考え、実践に結びつくような取組を目指していきたいと考えていますので会員の皆様方の積極的なご参加をお願い申し上げます。

第一回講演会

平成二十二年五月十五日(土)

「日本社会における民族学校」
『京都国際学園の過去・現在を中心に』

京都国際中学高等学校 校長

河 東 吉 氏

河東吉（ハドンギル）氏は、在日二・五世（母親方からは在日三世、父親方からは在日二世の意）として東京に生まれ、高校までは日本の学校に通学。一九七〇年ソウル大学に入学、大学院修士中退。その後日本で貿易マンとして過ごされたあと、㈱大阪国際理解教育研究センターの事務局員、理事に就任、NPO法人在日コリアン高齢者支援センターを設立。在日高齢者のための介護施設を展開され、二〇〇七年四月から、京都国際中学高等学校の校長に就任。講演では、民族学校の現状にとどまらず、日頃考えておられることをお話いただきました。先生の意を尽くしていない部分も多いかと思いますがお許しいただき、お話の一部を紹介します。

現在に至るまで

講師の紹介で、苦勞してきたという言葉をいただきましたが、い

ろいろな挫折を経験したといえる。父親は強制連行ではなく、十七歳で日本に渡ってきて神戸市の長田区でゴム長の製造に関わっていた。私は中学までは日本名で過ごし、高校で本名を名乗った。都立高校に入って大学は文系に進み、将来は体育の教員になりたいと思ったが、高校の先生からは、日本では学校の教員にならない、父親の仕事を引き継ぐか医者になるかなので理系に進むといういわれた。そういうこともあり、自分のルーツを知りたくソウル大学に進学した。当時、韓国は三年間の国民皆兵制を敷き、在日韓国人は免除であった。私は韓国で一年後に生まれたことになっていて、兵役免除のためには六年間の義務教育が必要であり四年（大学）では足りなく、あと二年と思ったが、大学院修士課程を中退し、これも挫折の体験といえる。

そして一九七四・七五年の頃の日本社会では就職の可能性はななく、帰化して国籍を変えない限り無理という時代だった。

五十歳になった時、在日のためには何かしたいと思い㈱大阪国際理解教育研究センターに入った。在日のオモ二たちは、多くの人が字を知らずハンゲルも日本語も書けない。また、年金もなく、八十歳になっても働いている。そういった実情を何とかしたいという思いから一円の補助もないなかで事業をしながらい日の高齢者支援の取組をつづけてきた。そして、二〇〇七年から京都国際中学高等学校の初めての民間人校長として勤務

している。世界中に四十二校、日本では四校あり、韓国の文科省より校長が派遣されるのだが、京都だけは現地採用ということで現在にいたっている。

「韓国・朝鮮・

在日認知度テスト」

次の資料を準備され参加者が正誤を選んだあと、それぞれの項目にその具体的裏付けとなるデータや、歴史的事実、経験された事例などをあげながら、わかりやすく説明された。

・韓国・朝鮮人同士の結婚の場合、女性の姓は変わらない。（正 誤）

・特別永住者である外国籍者には地方自治において選挙権がある。（正 誤）

・外国籍者であっても地方教育公務員の「教諭」になれる。（正 誤）

・一九五〇年生まれの在日韓国・朝鮮人は日本国籍を持っている。（正 誤）

・現在の在日外国籍住民の中で一番多いのは中国籍者である。（正 誤）

・「北朝鮮」の正式国名は朝鮮民主主義共和国（DPRK）だ。（正 誤）

・日本には約3万の氏があるが、韓国・朝鮮にある姓は約三〇〇のみである。（正 誤）

・渡来系氏族の秦氏は中国の秦の始皇帝の末裔である。（正 誤）

・富士山の「ふじ」は朝鮮語に由来している。（正 誤）

・朝鮮人は以前、鮮人と呼ばれたが、これは朝廷の朝の字がおそろいのためだ。（正 誤）

京都国際学園の過去と現在

次に、「『民族学校から韓国系国際学校への変貌』」と題した資料をもとに、校長を務めておられる京都国際中学高等学校について、丁寧なお話があった。学校は在日同胞一世たちの手で一九四七年に創立されたが、六十年代に入り韓国政府の支援を受け、二〇〇四年に学校教育法第一条校の認可（それ以前は各種学校）を受けた。その理由は、九十年代にはいつて学生数が減少し、運営に困



難をきたしてきたことによる。

一条校になってからは、私学援助の対象になり、日本人生徒も入学してきたが、学校名に国名を使用することはできなくなった。現在は「人間の尊厳性」と「豊かな国際性」を根本とする韓国系の国際学校で、二十一世紀に活躍する国際人の育成を目指している。現在の生徒構成は本国生十五%、H

本人一八%、在日系六七%（在日

はなく日本社会の問題ではないのか？ など、これからも社会に目を向けていきたい、といった講演をしめくくられた。

終了後、出席者からは先生の時間を超えての熱いお話に対して大きな拍手が湧き起こった。

きと六十年代オーデオの世界に遊ぶ枯響庵の主でもあります。

パナマへの道

「パナマの日曜日」 はぐれ社員うたかた駐在日記

第二回講演会 平成二十二年七月三日(土)

元(株)シャープ社員 金澤康郎氏



パナマという国については、多くの日本人にとってはパナマ運河とパナマ帽といった言葉を耳にす

る程度ではないかと思われるが、日本から見て地球の反対側に位置するパナマに日本企業の駐在員として勤務され、その体験を出版された金澤康郎氏に楽しく興味深いお話を聞きました。氏は、京都市紫野高校卒業のあと上智大学外国語学部卒業、シャープ株式会社に入社し二〇〇六年に退社。現在は、不登校生徒の学びを支援する(株)アンディモ副代表。蓄音器の響

大学でスペイン語を学び、(株)シャープに入社した三年後にパナマに派遣され四年間勤務、その後本社に戻り、結婚し子供も生まれ家族と一緒にまた七年、計十一年間パナマにいた。本社のように勤務時間に縛られることはないが、見方を変えれば二十四時間勤務を十一年間やったようなものである。現在の日本はリーマンショックに端を発して経済危機ともいえる状況にあり、年越し派遣村など多くの社会問題があるが、私が行っていた頃のパナマも貧富の差は大きかった。しかし飲食店の店

長の過労死とか、上司の叱責によ

る「うつ」とかはパナマではありえないと思うし、自殺の話も聞かないし、餓死の話も聞かなかった。パナマが素晴らしい国だと言っているわけではない、独身で行っていた四年間には四・五回空き巣に入られたし、路上強盗にあったり、サルモネラ菌中毒にあったり、いろいろなことがあった。しかし家族を連れてパナマに行けと言われたとき、子どもの一人は生まれたばかり、もう一人の子供は脊椎の異常による難病で病院から離れられないという事情にあったが、家族でパナマに行ってもよいと思った。

パナマとはどういうところか？

私がパナマというとき、中南米一般ととらえてもらっていたが、一言でいえば人間がおおらかで、やることもおおらか、悪く言えばアバウト。南北のアメリカ大陸の中心にあり、地図の一番細いところは運河が通り、自国通貨を持たず(米ドル)、二二〇ぐらいの銀行がある銀行センターのある中南米の中心地、一年のうちの八ヶ月は雨季で四ヶ月は乾季、湿度は高くクーリングしたスーツも一週間置いておくとカビが生えるとい

うような国である。

(……地図や運河、氏がかかった人々や、学校の先生たちの写真をスクリーンに映しわたりやすく、楽しい説明が続く……)

娘を幼稚園にいたが、娘の難病をわかってもらうための冊子を作った。受け入れてくれないだろうと思うながら、園長に頼みに行くと、園長はメモもとらずに「問題ない、対応しますから連れてきてください」と言われ、翌週から連れていった。娘は言葉がわからないのに、いきいきと楽しくやっていた。日本式とは、受け入れるにあたっての体制や責任、養護学校にとかでまず断られる。その代り、受け入れたらきちんと個に対応してちゃんとやる。どちらがよいのか？

ただ、最初からシャットアウトはしないというパナマが私たちにありがたかった。娘は車椅子だが、日本から海外へツアー旅行を申し込んだとき旅行会社との対応が大変だった。日本のサービスは完ぺきと思うが、パナマから他の国へ旅行に行くときは日本からの時ほど大変ではない。向こうの国が良かったと思うのは、向こうの人たちが良かったのではないかと思います。

パナマで出会った人たち

シンパティコというパナマの言葉がある。気持ちがいいとか、心が通じるという意味だが、シンパティコの関係になれば何事も気持ち良く展開していくが、その反対語のアンパティコは駄目な奴というような意味で、人間関係でアンパティコと思われると何事もうまくいかない。パナマの人は大人になっても職種や、仕事上の上下関係、年齢差などに関わりなく、お互いに友達とか友情という言葉を使い、友達、友情という感覚をもっている。

(……氏が現地で雇った秘書とか、メイド、会社の顧問弁護士との人間関係、やり取りの中で日本人の感覚との行き違いを中心に、いろいろな人との関わり、事例を取り上げながら説明された……)

「雇用のことといえば、当時は失業率が二十五〜三十%の時代だったが、自分のプライドが傷ついてまで働くことをよしとしない、たとえばそのあと仕事がなくてもという国民性がある。皆いい人だが、すぐに辞めると言い出す。定職がなくとも皆が寄って暮らせば何とかなるという暮らし方をしている。

る。パナマは今の日本とは比較にならないほど貧乏な国だが、人と人が孤立せずつながっている、つながりのある社会である。支えあうというよりは、日本の感覚でいえばもたれあう、もたれあえることのできる社会といえる。

パナマの子どもたち

パナマの子どもたちは、日本の子どもたちとは比較にならないほど貧しいが、少しも卑屈なところがない。パナマで撮影した子どもたちの写真を見てほしい。街角の靴磨きの少年の笑顔はいきいきとしている。物が豊かでない分、遊び道具一つをとっても、ありあわせのものを上天し作る。大人が見知らぬ子どもには声をかけてはいけない日本の社会とはあまりにも

違う。

(……最後に、一九八九年十二月二十二日、パナマで氏がアパートから撮影したビデオ映像が流され、氏の身近で起こった戦争についての体験が話された。パナマという国の私たちの知らない別の面の現実であり、講演後にパナマの政治情勢、国情についても氏のわかりやすい説明があった。……)

*氏は、講演題と同じ題名の書物を出版されており、講演会参加者にプレゼントしていただいた。講演では聞けなかった興味深い話がいっぱい書かれており改めてパナマという遠い国について学び、知識や関心を深めることができた。

第三回講演会

平成二十二年八月二十一日(土)

「香りの文化」「香道」体験

香老舗「薫玉堂」営業部

渡邊 高 広 氏

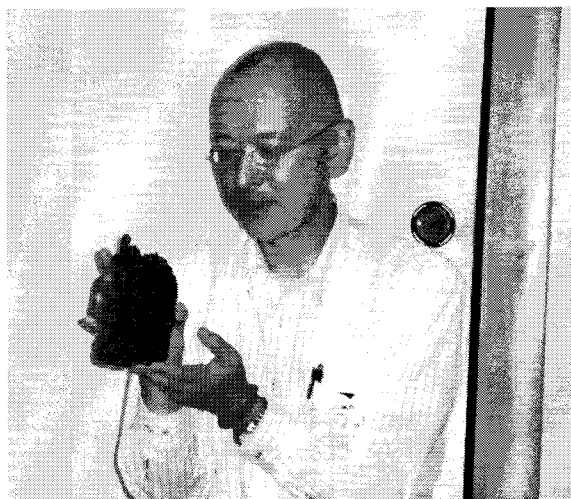
夏の研修会は香りの文化「香道」を体験しました。香道は、山文化の中で成立したもので、一定の作法に従い沈水香木の一室町時代の慈照寺を舞台とした東片の香りを鑑賞する心豊かな芸

道です。日本には、二

つの流派、志野流(武家系)と御家流(公家系)があり、礼儀、作法がありますが、当日は略手前ということ、で、堅苦しくなく、香炉の持ち方、香の聞き方などを教えてもらいながら、体験させていただきました。また、香の歴史、種類、産地などについてもお話しいただきました。

三種香の体験

組香と呼ばれる香の異同をあてる香の楽しみ方のなかで、三種香と呼ばれるものを体験しました。まず三種類の香木が用意され、それぞれ香木からごく少量をそれぞれ三つ切り取って、九個の香の包みにします。その九個をまぜあわせ、その中から三包みを取り出して、三回香りが回ってき、香を聞きわけます。香を鼻で嗅ぐことを聞くという表現をします。そしてルールに則って紙の上に三種類の香の関係、組み合わせを書きます。そして、正解を競うわけです。まず、香りの聞きかたですが、香炉の持ち方、鼻の近づけ方



などの形を真似ていくことができても肝心の香りの記憶のとめ方の難しさです。講師の方からは、例として、この香りは……田舎の祖母の部屋の香りに似ている……というような、自分なりの言葉で表現し直して記憶することが、香りの記憶のコツと教わりましたが、なかなかうまくいきません。それでも、参加者の中には香りをあてていく方も結構おられました。

仏教伝来と共に

日本書紀によると、五九五年四月に淡路島に流れ着いた木を焼いたところ、大変香りが強いものがあり、聖徳太子に献上されたという記録がある。香木は仏像を彫る

など宗教的(仏教)に利用されてきたが、やがて香木を炷き香りを聞いて鑑賞する「聞香」や香りを聞き分ける遊びである組香などに体系化され、日本独自の芸道として発展していったとされる。現在、正倉院に蘭麝待という天下第一の名香と謳われているものがあるが、長さ一五六センチ、重さ一・六kgの沈香と呼ばれる高級香木で九世紀頃に中国より伝えられたとされている。香の原料は我が国では採れず、伽羅と呼ばれるものなどはベトナムでしか採れない沈丁花科のものです。その価格は金の価格の四〜五倍するといわれています。昔の人は今ほどの入浴習慣がなく、体臭の防止がはじまりとされるが、室町時代の東山文化のころ茶道や華道とほぼ同時に作法なども大成されていき、現代に伝わりとされている。

香の原料と産地

香の原料は我が国では採取できず、輸入にたよるしかなく、高価で貴重なものである。また、江戸時代につづいた鎖国や、現在では産出国による稀少さゆえの輸出禁止措置などもあるが、香道に用いられる原料の主なものとして産出国についての説明をしていただいた。

- ・伽羅(きやら)
ベトナム産、沈香の最高級品、白檀(びやくだん)
マレー諸島からインドに分布する半寄生の常緑高木
- ・沈香(じんこう)
東南アジアに産する沈水香木、沈丁花科の木質内に樹脂が蓄積され残ったもの
- ・麝香(じゃこう)
中国・シベリア地方に分布するジャコウジカ科の雄の香囊の分泌物
- ・丁子(ちようじ)
インドネシアのモルツカ諸島、東アフリカ諸島に産するフトモモ科の常緑高木の花蕾を乾燥させたもの
- ・甘松(かんしよ)
中国・インドに産するオミナエシ科の多年草の根や茎を乾燥したもの
- ・貝香(かいこう)
巻貝の蓋。ザンジバル産が良質とされる
- ・鬱金(うこん)
熱帯アジア原産のショウガ科の多年草
- ・龍脳(りゅうのう)
ボルネオ、スマトラに産する龍脳樹より採取する白い鱗片状の結晶
- ・山奈(さんな)
インドから中国南部に自生するショウガ科の多年草の根茎
- ・零陵香(れいりようこう)
中国・アラビアで栽培され線香や匂い袋の高級品
- ・大茴香(ういきよう)
ベトナム北部から中国広西省・雲南省に産する多年草、香料・薬用・料理に用いられる。
- ・鬱金(うこん)
熱帯アジアが原産のショウガ科の多年草、染料・香料・薬用に用いる。

講演のあとで

出席者からは・西洋の香水との違い・香りを化学合成できないのか・お線香や匂い袋についてなどの熱心な質問が相次いだ。丁寧にお答えいただき楽しく体験実習を終えた。

第四回講演会 平成二十三年一月二十九日(土)

「日本の文様 今と昔パートⅡ」

図案家 大内 惣 介 氏

第四回の講師は昨年に引き続き 図案家の大内惣介先生にお願いしました。先生は日吉が丘高校日本画科卒、図案家の父大内精二氏に師事、千九百八十年独立し「春紅園」設立、以降、図案文化の向上発展につとめ様々な活動を進めておられます。昨年の一月に「日本の文様 今と昔」という演題で講演をしていただいたところ、会員の皆様から「ぜひ続きが聞きたい」という声が多くあがり、昨年に続き大変興味深いお話をきかせていただきました。

日本の文様文化(伝統産業)の現状

日本の伝統産業が衰退し、消えかかっている。伝統文化に携わってきた人たちが高齢化し、あとを継承していく若い人たちに乏しい問題がある。伝統文化の灯を消さず何とか未来に伝えていきたいと思っている一人の職人として話したい。



伝統文化の衰退には様々な原因が考えられるが、現代の日本人が、日本古来の文化について、あまりにも知らない、無知であるということがその大きな要因であろうと私は思う。なぜそうなのかわかっている、昨年もふれましたが、古来中国から

日本に入ってきて、日本の独自色も加味しながら発展してきた日本の文様文化が、明治維新という江戸から明治への過渡期に価値のないものとして否定されていったこと。そして、第二次世界大戦の敗戦による社会変化が日本古来の文化の継承にとつてますます困難な環境をつくりだしていったのではないかと思います。

日本の文様は、奈良時代に中国から入って来たものが元になっており、文様の一つ一つに意味と歴史があるのだが、私たちは現在何も知らずに使っている実情にあるわけです。

日本の吉祥文化、その源流の 中国文明

昨年は松竹梅、鶴亀について、その文様が吉祥としての意味を持つ成り立ちを中心に話しました。今回はそういった吉祥文化の源となる中国文明についてお話ししたいと思う、ということで「中国の北と南の自然と思考」と題し揚子江以南の江南と黄河以北の河北、それらを融合したものとしての中華思想について、様々な観点からの考察、説明を資料を準備されお話をされました。

陰陽五行の成立

つづいて宇宙の万物を支配する二つの相反する気、陰陽と宇宙や世界、人間、人生のすべてを構成している五つの元素とでもいう五行について、五色文化を中心に図を描き例示しながら説明をされました。

五節供について

そして、元日（一月一日）・上巳（三月三日）・端午（五月五日）・七夕（七月七日）・重陽（九月九日）という、奇数を陽の吉数としそれが重なることを貴んだ思想による五節句についての由来や説明、私たちがひな祭りや、お花見、鯉のぼり、などの行事に託した意味や願いについて、その中身の伝達が失われ、形だけが今に残っていることについての熱のこもったお話をいただきました。

*講演を終えての参加者の感想は、「鯉のぼりを今まではただ漫然とみていたが、今年からは見方が変わる」、とか「先生のお話で人口を開いていただいたので、もう少し奥のほうに入っていきたい」など感謝の言葉が続きました。

現代教育研究協会の歩みをふりかえる（その一）

新しく入会された会員の方から、協会は、いつ頃何を目的として生まれてきたのか？ という問いかけをされるが多くなりしました。協会が発足してから四十五年という長い歳月が経とうとしています。そこで今号から現代教育研究協会の歩みを紹介していきます。

発足の頃

（京都教育研究所）

大学紛争で教育界が大揺れにゆれていた昭和四十四年に、京都市立塔南高等学校初代校長、洛陽工高校長を歴任された森藤吉氏の呼びかけで、当時の京都の教育の現状を何とかしていきたいと考える幼・小・中・高の教員を中心に四十余名が集まって、営利を目的としない民間の教育研究団体「京都教育研究所」を立ち上げ森藤吉氏が理事長、研究所長に就任した。

多くされていなかった、全国の学校で使用されている「通知表」の収集と内容の分析、幼児教育におけるしつけや言語教育などの分析研究、などに取り組み、その成果を研究紀要にまとめて刊行 ②特別講演会として湯川秀樹博士、当時の国立教育研究所長、文部省審議官、教科調査官などの講演会を開催している。

社団法人の発足

（現代教育研究協会）

昭和四十四年から四十八年にかけて教育研究の実績を積み上げていく中で、昭和四十七年十一月に森藤吉研究所長が京都の地域社会発展に尽くした功労者に贈られる京都新聞社の「教育賞」を受賞した。これを機会に、研究所の公的性格を確立し、社会的責任の明確化を図り、さらにその基礎をかため一段と充実した研究実践をめざして、研究所を文部省認可の法人組織とし、わが国の教育の改善・振興に一層寄与することを期した。

法人の名称や組織について文部省教育研究開発室の指導を受けて、昭和四十八年十二月十七日付で大臣の認可を得、法務局への所定の手続きや法人設立総会の議を経て、「社団法人 現代教育研究協会」が発足、誕生した。

初期は「学校教育」を中心に教育目標・評価・特別活動・進路指導などについての研究、さらには園・校種間の連携についての研究、昭和五十七年以降は「企業内教育」「家庭教育」「学習塾と学校教育との関わり」などに研究対象が広がった。これらの取組は現在の「生涯学習」時代の到来に對する当時としての先進的な取組として位置づけられる。昭和六十年以降は主たる研究対象を「生涯学習」に向けていくのだが、そういった公益法人としての歩みの紹介については次回に譲りたい。

春の研修旅行

平成二十二年三月二十八日～二十九日

山陰の桜と湯けむり紀行

人と自然の博物館、香住大乗寺、出石城下町、湯村温泉宿泊と散策



に向かいますが、中国道の宝塚トンネルが、四km洪滞ということで、阪神高速魚崎ICから六甲有料道路を通じて、三田に向かうというルートをとることに急遽変更です。

取組がされていますが、時間が早かったのか、訪れる人の少なさが少々気になりました。一時間見学のあと博物館を出て、和田山で美味しい昼食をいただき、国道九号線に乗って、バスは宿泊地の湯村温泉に向かいます。

三田は高層マンションや大型店舗、住宅が立ち並び、数十年前の、のどかでひなびた国鉄福知山線の時代の面影は大きく変わっています。

旅装を解き、まずは温泉街の散策。かつての人気ＴＶドラマ「夢千代日記」の資料館を巡ったり、荒湯でゆでたまごを茹でたり、春來川治いの足湯につかったり、土産物店めぐりなど三々五々、温泉

博物館は人と自然とい
う長大なテーマのもとに

作られ、一Fから四Fまでの展示スペースを持つ大施設で、二〇〇六年八月に丹波で大型草食恐竜

京都で桜の開花宣言があつたと

はいえ、ちよつと肌寒い朝、京都駅八条口に集合しバスに乗車、春の研修旅行が始まりました。

兵庫県立「人と自然の博物館」

の化石が発見され、二〇〇八年四月からはそのクリーニング作業（恐竜の化石から余分な石を取り除く、精密な手作業）も公開され見学できます。様々なイベント、

取組がされていますが、時間が早かったのか、訪れる人の少なさが少々気になりました。一時間見学のあと博物館を出て、和田山で美味い昼食をいただき、国道九号線に乗って、バスは宿泊地の湯村温泉に向かいます。

旅装を解き、まずは温泉街の散策。かつての人気TVドラマ「夢千代日記」の資料館を巡ったり、荒湯でゆでたまごを茹でたり、春米川沿いの足湯につかったり、土産物店めぐりなど三々五々、温泉にもゆっくりつかり日頃の疲れをいやしました。

夕食は懇親会場の広間で、美味しい料理を前に楽しいおしゃべりと歌がつづき、食後は、再度湯に入ったり、温泉街に出たりとさまざまな時間を送りました。

さて、朝湯を楽しんだ人も多かったのではないかと思います。が、午前九時にいづつ屋を出発。山田応挙の襖絵で名高い香住大乗

平成23年度 (社)現代教育研究協会総会・講演会

日時 平成23年**5月14日(土)** 10:30~12:00

場 所 インターナショナルアカデミー 1階講義室

1. 講演会 10:30~12:00

演題 「変化する子どもを取り巻く状況とその対応」
ーパトナの窓から見えてくるものー

講師 桶谷 守先生

(京都教育大学教職支援センター教授)
(京都市教育相談総合センター参与)

2. 昼食会 (ほっこりたいむ)

3. 総 会 13:00

22年度事業・決算報告と23年度事業・予算(案)
一般社団法人への移行について

寺に向かいます。途中付け替え工事の完成に近づきつつある余部鉄橋の下をとり、香住に到着。小雨のぱらつくなか、応挙とその一門による襖絵の見学です。応挙は亀岡市の農家の次男に生まれ、無名の頃に大乗寺の住職と出会いその援助を受けて絵を学び画壇の頂点に至りました。後年、寺に恩返しとして多くの襖絵や軸物を描いています。どこからみても正面を向いている虎の眼や襖の置かれる場所の時間による光の変化を計算に入れた作品などいていねいなご説明を聞きながら、高度な技法に感

心することの連続です。

そして、香住名産の海産物の買い物と豊岡市の製造直売のカバン工場での買い物をつたのしみ出石に向かいました。昼食に出石そばをいただいたあと、城下町散策のスタートです。城下町はそんなに広くはないのですが、見どころも多く、それぞれがここぞと思う場所を巡りました。途中雨の降る時間もありましたが、おおむね雨もあり街を満喫しました。

そして、バスは京都に向かい、午後六時無事に八条口に辿り着きました。

日帰り研修

平成二十二年十一月十六日(火)

大阪箕面・勝尾寺、池田市・久安寺と
アサヒビール工場見学

晩秋のおだやかな一日、日帰り研修旅行は大阪府の北摂地方、箕面・池田の紅葉の名所をめざし八条口バスプールを、午前九時に出発しました。最初の目的地は西国二十三番札所であり、七六五年に開創され十一面千手観音を本尊とする大阪府箕面市の勝尾寺です。

周辺の山々に紅葉の季節が訪れる秋には、八万坪の境内は赤や緑や黄色に彩られ、さながら一幅の絵画のような美しさです。勝尾寺の寺域は年々美しく整備され、近年は勝運をもたらす寺としても有名になり、境内のあちこちに赤い「勝ちダルマ」が奉納されています。ゆつくりと各寺院を散策し拝観したり、石組で作られた境内の知恵の環を巡ったりのひとつと、きの後、勝尾寺を出発し関西花の寺の十二番霊場、池田市伏尾の久安寺に向かいます。途中、箕面ドライブウエーが渋滞し、予定より時間がオーバーして久安寺到着。



室町時代初期の作で重要文化財の美しい楼門の下、愉快なご住職の出迎えを受けました。密教教学曼

茶羅思想によるという、紅葉に彩られた庭を通って舍利殿涅槃堂へ向かいます。そこでご住職のあり

れます。観光ホテルの温泉は温泉法最高順位の本格療養泉として、たいへん優れた泉質のもので、びつくりするほど肌がねっとりとなめらかになり、天然温泉としてリピーターが多く、評価が高いということが十分にうなずけるものでした。

しむためのつぎかたのコツなどの説明を受けて、今日一日のしめくくりとしてのビールを楽しみました。そして、売店で買い物を楽しんだ後、バスは京都駅にと向かい、無事に一日の旅を終えました。

編集後記

二十二年度は、法人制度改革のなか一般社団法人への変更に向けて、総会で方向性の確認、理事会では新定款案の検討に取り組みました。

二十三年度は申請の段階に至るとの見通しをたてているところですが、今年度の事業があらかた終了し、まとめの時期を迎えていた三月十一日の午後、東日本大震災が起きました。

当協会においても、三月末に予定していた宿泊研修を理事会の総意で中止いたしました。想定以上、想定外の災害に、亡くなられたり、被害にあわれた多くの方々に、改めて追悼とお見舞いの意を表します。

がたいお話と楽しい歌のひとときを過ごし、虚空園で記念の集合写真を撮ったあと、昼食場所の箕面観光ホテルに向かいました。

美味しい会席料理もそこに、最上階の大坂平野展望大浴場へ向う人、ゆつくりと食事をしたあと口ビーでくつろぐ人などに分か

たきます。ビールをおいしく楽